

初洋行の翻訳家 空腹を冷やす



東江一紀

フランクフルト・ブック・フェアの季節である。毎年、秋のこの時期になると、日本で翻訳書を刊行している出版社のほとんどが、版權担当者や編集者をフランクフルトへ送り込む。今年は、本誌編集長も勇躍その大デレゲーションに加わられたとの由。

フランクフルト直行便は、便数が少なく

運賃も高いので、たいていのエージェント、編集者はロンドン経由で行き、ついでに英国の出版社を回ったり、事前・事後の商談をかたづけたりする。

というわけで、フェアの前後約二、三週間は、日本の翻訳出版界の発注側の人びとが、ごそっと日本からいなくなるのだ。

ま、訳者の側からいえば、神無月ですわね。たいていの編集者が、「帰ってくるまでには、原稿、仕上げといてくださいよ」などと釘を刺してから出かけるわけだけど、あつしら、催促されない原稿をせつせと書くほど殊勝なタマジやあごさんせん。日ごろ、やいのやいのと催促されて、それでも遅々として進まない仕事、神々の留守中にスイスイはかどつたりしたら、そりゃ神々の威信にもかかわるというものだ。

などと、勝手な理屈をつけて、この時期はいつも、潜在的な労働意欲をさらに深く深く潜在させ、はるか西方に手を合わせつつ、命のランドリーをさせていたでいます。

ところで、わたし、その神々と同じ時期に、フランクフルトへ出かけたことがあるのだ。ちようど十年前の話。その年出した訳書が、少し売れたもんで、初の海外旅行を試みようということになり、たまたまブック・フェアの直前だったから、どうにか安宿を確保して、お高い直行便で行きましたです。

フェアのあとは、ニューヨーク、シカゴ、ダラスと転戦する予定。生まれてはじめての洋行（↑古い！）にしては、ずいぶん欲張った二週間の旅程だった。

フランクフルトの中心街は、作りが札幌によく似ている。中央駅から広い道路がまっす

ぐに伸びて、三百メートルほど歩いたところで、細長い帯状の公園と直角に交差している。そう、大通り公園みたいに。

角には、オオドリ・ヘップバーンの銅像が立っている。というのはもちろんうそで、ゲーテの像があるんですね。

さらに二百メートルばかり行くと、薄野を思わせる歓楽街が広がる。

そして、札幌の東西の中心軸である創成川よりだいぶ川幅は広いが、駅前通りと平行に、マイン川が流れている。

だが、しかし、哀しいかな、この札幌は、言葉の通じない札幌なのだ。

フェア会場であるメッセに行つて、神々のあいだに交じり、英米の出版社のブースを回つてはみたものの、飛び交う英語がぜんぜん聞き取れない。ブースによつては、マンツーマンでゆっくりと本の説明をしてくれるのだが、英語であることがかろうじてわかるのみ。二、三時間であきらめて、パンフレットを集めることに専念した。

そうなると、もう次の日からは、わざわざ会場に行く意味がない。神ならぬ身の気軽さ、二日目は市内をひたすら歩き回り、三日目は、ハイデルベルクへ行くことにした。

古都ハイデルベルクは、フランクフルトから汽車で約一時間。こぢんまりしたきれいな

街であります。

駅に降り立ち、四方を見渡して、遠くに見えるお城を目的の地と定めると、わたし、すたこら歩きだしました。で、三十分ほどしたら、猛烈におなかがすいてきた。辛抱たまらず、最初に目に留まった屋外カフェに入ったと思いいねえ（屋外に入るとは、これいかに？）。出てきたメニューが、ドイツ語オンリー。何が書いてあるのか、さっぱりわからない。食べ物と飲み物の区別さえつかない。

でも、一行ずつ読んでいくと、*Espresso* というのがあった。こりやあ、エスプレッソ・コーヒーでしょう。あとは知らない単語ばかり。ずうっと後ろのほうに、やっとひとつだけ、読める単語が見つかった— *Spaghetti* です。はっはっは、隠れてもむだだよ、スパちゃん。わたし、イタリア語には自信があるんだからね（↑うそ）。

正確には、*Spaghetti Eis* と書かれていた。どういう種類のスパゲティイかは、見当もつかないが、いやもう、この際、なんでもいいです。ウェイターを呼び、「おいら、イタ飯系が好みでね」という顔をこしらえて、エスプレッソとスパゲティイを指で差した。

さて、待つこと数分、わたしのテーブルに運ばれてきたのは、ぬあくんと、濃いめのコーヒーとソフトクリーム！ こ、こ、こ、

これ、なあに？ と、胸のなかでにわとりのようにつぶやきつつ、ウェイターのほうをばうかがうと、「ヤー、スパゲッティ・アイス」などと言っている。

スパゲッティ・アイス？

よおく見ると、そのソフトクリーム、にゆるにゆると麺が折り重なってもつれ合ったような形状をしてるんです。うくん、それはまさに、スパゲッティ・アイスとでも名づけるしかない代物であった。

わたし、イタ飯系の顔を急遽甘党系に作り替え、さもうれしそうに、「やっぱり、晴れ渡った（肌寒い）秋の朝は、スパゲッティ・アイスに限るよね」って顔で、むさぼり食べました。空腹を満たしたんじやなくて、空腹を冷やしたのね。しくしく。

Eis は *ice* であるという貴重なドイツ語の知識を身につけたわたしは、甘ったるい水腹をかかえ、まるで修験者のような険しい面持ちで、お城へのぼっていったのだった。

♪流れる雲よ、城山に

のぼれば見くえるきみの家♪

と、頭のなかで錯乱ぎみに鳴り続けるバックグラウンド・ミュージックは、もちろん、われらが梶光夫でありました。

『青春の城下町』——誰も知らないか。

この項、続く（↑ほんとに？）